

# 赤城 文治(あかぎ・ぶんじ)

## 1、プロフィール

少年時代より作歌をはじめ、昭和3年に「アララギ」に入会。結城哀草果は赤城の歌を「日本歌壇の高山級である」と評した。本県歌壇の指導者として活躍した。

<生没>

1900(明治33)年11月23日 ~ 1956(昭和31)年11月27日

<代表作>

歌集『秋燕』『秋燕以後』

<青森との関わり>

旧制弘前中学をはじめ、県内で教鞭をとる。弘前アララギ会、「青森アララギ」など、県歌壇で活躍する。

## 2、作家解説

明治33年11月23日、秋田県花輪町に父徳太郎、母タカの長男として生まれる。赤城文治の筆名を使用するようになったのは何時頃からののか定かではないが、大正6年4月、秋田県立師範学校本科第1部に入学した頃から短歌や創作を試みていた。14年に母校の花輪尋常高等小学校に勤務、この頃、同郷同職の中島耕一の「草の実」に参加、短歌会にも出席し、万葉調の歌を作った。昭和3年「アララギ」に入会。5年4月青森県立柏木農学校教諭として来任。10年に、秋田県立小坂高等女学校教頭となる。11年の秋、仙台の東北アララギ歌会に出席し、結城哀草果に会う。「芥川龍之介から病的な神経を除いたとおもはれるやうな、秀抜な顔に微笑をうかべて君はゐた」(哀草果)。15年、県立弘前中学校教諭となる。18年、秋田アララギ歌会で土屋文明と会う。19年、生徒と岩木山麓開墾に勤労働員、遂に発病。21年4月、弘前アララギ会を結成、指導者となる。東北アララギ「群山」の結成に参加。22年、和徳村立和徳中学校長となる。快方に赴いていた病気が10月に再発する。23年8月、弘前アララギ会に土屋文明を迎えた。復

刊した「青森アララギ」に参加。24年、哀草果の「山塊」に参加。26年、弘前大学病院において前後2回の肺葉切除の成形手術を受ける。27年、弘前市富田町に転居。30年、「青森アララギ」「青森潮汐」誌上で「短歌の社会性」について田向竹夫と激しく論争。31年まで続いたが、これは抒情詩としての短歌、アララギの歌風の根本に関わる極めて重要なものであった。31年11月30日逝去。享年56。49年10月、花輪町長福寺門前に歌碑建立。53年11月、歌集『秋燕以後』刊行、375首を収めた。

歌碑の歌「此の岡の比と本桜子とをれば谷を渡りて花乃散りゆく」

代表作

「うつせみの命を惜しみ老いづきて否も諾(う)もなく肋骨きりぬ」  
「たかぶりてねざりし我は谷ひびく水の暗きに下りて来にけり」  
「離りきし重ひもしるし岩木山かすみて海の上に立ちたり」

### 3、資料紹介

○歌集『秋燕』

図書

1954(昭和29)年6月1日

188mm×127mm

歌集『秋燕』は、昭和21年から28年までの間に「アララギ」「群山」「山塊」「青森アララギ」などに発表した歌の中から600首を選出して一巻とした。学校教諭、闘病生活の人生の中で「日本歌壇の広場から客観してすでに高山級である」作品が収められている。